まえがき

1963年11月24日、九州歴史資料館発足一周年記念の記念講演会に鏡山猛館長の要請で西下された恩師八幡一郎先生と、一夜由布院で御教えをうけることができた。久し振りに先生と深夜まで御話しすることができたが、先生の私に対する御教授は、私の「縄文農耕論」に対する問題と、「大陸半島と西日本」との問題に集中した。先生は、今日新しく登場しつゝある考古学と周辺科学との中間領域の問題について、すでに私の学生時代から問題を提起されていた。特に、自然人類学や、文化人類学、民俗学などの総合とその中間領域の問題についての講義は、30年前の私達学生に深い感銘をあたえたものである。私も50才を越え自分では一人前のつもりが、先生の学識を拝聴していると、まるで子供のように無学であった。

湯布院の宿は、胸をわずらい療養の甲斐なく永眠された中谷治宇治郎先生の故地であった。青春をともにした同じ縄文学者であったゞけに、先生は情熱をこめて話しに熱中された。

縄文文化の西日本と大陸、半島の話しでは「縄文農耕論」に話題が集中した。先生は、民俗学、人類学、育種学の問題など広い範囲の諸点から問題を提起され、時に質問をする。そういう時は、30年前、学生時代のSeminarのようであった。私は縄文文化の終末にみられる黒色研磨土器の九州での出現と同時に、カメ棺の葬制としての固着の問題をあげ、この葬制をつうじて集落と生産のうえに大きな変化のあったことを述べた。先生はじっとそれを聞かれておられたが、弥生文化の前段の諸相として、縄文のカメ棺と、その葬制の固着は、非常に興味あることだといわれた。「考古学論叢」2号に「縄文時代のカメ棺」をとりあげたのは、縄文農耕論の一つの課題と考えたからであるが、この論集に先生の共感を得たのは嬉しいことであった。昭和の初め頃弥生文化におけるカメ棺研究が揺籃期であったように、この論集が縄文文化の埋葬におけるカメ棺固着の葬制研究のスタートであることを確信しながらすゝめていきたい。

八幡先生と語り明した一夜は竹林の中の日本間で、炭火に鉄瓶を掛け、何度もお茶を入れ替えながらの語らいであった。九州山脈の盆地、湯布院の亀ノ井山荘は初冬の冷えこみが強く、明れば名物の深い霧と、霧氷とが九州とは思えぬ氷るような朝であった。先生は豊かな温泉につかって、清々しく健康そうな顔をして東京にむかわれた。

「縄文のカメ棺」について、私はもう一つの思い出がある。1967から68年にかけて、膿胸のため胸部の切開手術をうけた。その生死の間に、「縄文時代のカメ棺」という論文を書いた。これは私のもう一人の恩師である鏡山猛先生に送る論文であった。先生は、「甕棺累考」なる論文を九州大学の「史淵」に書かれた。私は、弥生文化における水稲栽培と、カメ棺葬制の固着に大いに興味をもち、「甕棺累考」を読んだ。弥生文化のカメ棺の追求で、先生は、縄文のカメ棺を注意し、縄文文化の葬制におけるカメ棺の問題を提起された。九州での私の研究は鏡山猛先生によって開かれたものといえる。

生死の間に書いた「縄文時代のカメ棺」は九死に一生を得た1969年一部を補筆して、「考古学ジャーナル」に起稿した。鏡山先生に記念として送るべき論文であったが、今から思えば不備な点が

多く、何時の日にか、「縄文時代のカメ棺―西日本における弥生式文化の前段の諸相」の中で、これをまとめたいと考えた。この「論叢」は、そうした過去の長い研究の継承から生まれたもので、執筆にあたられた研究者の諸氏に心から感謝申し上げ度い。そして八幡一郎、鏡山猛の両先生の御健康をお祈りし、益々私達後輩の御指導を賜わりたいものだと考えるのである。

1974年3月25日

湯布院の思い出

賀　川　光　夫